

臨 濟 宗 の 仏 事



共 に ま な び
共 に お が む

臨濟宗の仏事

共にまなび

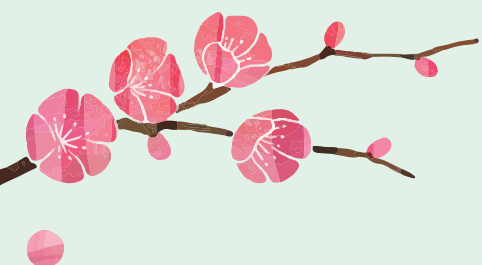
共におがむ

目次

『臨濟宗の仏事』序	2
仏事の一年	4
● お盆（盂蘭盆会）	6
● お施餓鬼（施餓鬼会）	14
● お彼岸（彼岸会）	17
● おおみそか 大晦日・正月	21
● 葬送儀礼	30
● 法 事	37
● お寺の法要	43

※本冊子の内容は、妙心寺ホームページでもご覧になれます。
檀信徒への教化活動にご利用ください。
<https://www.myoshinji.or.jp/rinzaibutuji/>



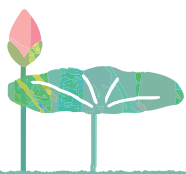


仏事の一年



	1月	2月	3月	4月	5月
季節の行事	挨拶 ▶ P.28 修正会 (1月1日～3日) ▶ P.25		お彼岸 (春分の日+前後3日) ▶ P.17		
通年の行事	葬送儀礼〈枕経・通夜・葬儀〉 ▶ P.30 法 事 ▶ P.37				
お寺の行事		涅槃会 (2月15日) ▶ P.48 		降誕会 (4月8日) ▶ P.44	
	開山忌 ▶ P.51 齋会 ▶ P.55				

5



お盆（^{う ら ぼん え}盂蘭盆会）

季節の行事

お盆は、精霊をお祀りする仏教行事です。精霊とは、亡くなった方の靈魂、ご先祖さまのことで、「せいいい」「しょうれい」「しょうりょう」「しょうろう」「(お) しょうい」などいろいろな読み方があります。

お盆の期間中には、精霊（ご先祖さま）を自宅にお迎えし、さまざまなお供えをして、『^{かんのんぎょう}観音経』『^{だいひしゅ}大悲呪』『^{かいがんろもん}開甘露門』などのお経を唱えます。

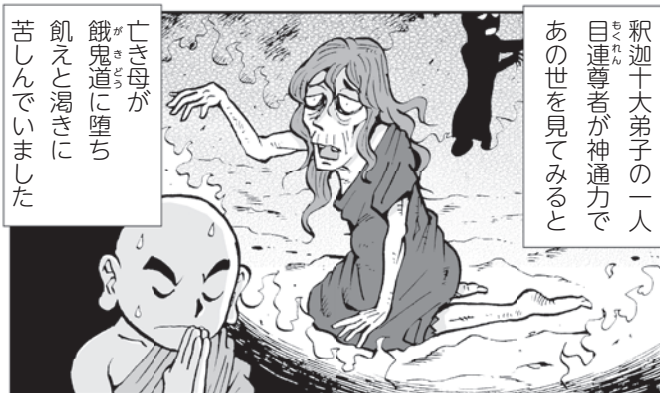
本来は、旧暦の7月15日に行いますが、13日に迎え火を焚いてご先祖さまをお迎えし、15日または16日の夜に、送り火や精霊流しなどでお送りします。昨今は、新暦の7月（新盆）あるいは8月（旧盆）に行われており、地方や寺院によって日程はさまざまとなっています。

なお、「盂蘭盆」とは古代インドのサンスクリット語「ウランバナ」を音写したもので、^{とうけん さか づ}倒懸（逆さ吊りの苦しみ）という意味です。この盂蘭盆が縮まって「お盆」になったとされています。

お盆の由来

昔、お釈迦さまのもとに、^{もくれん}目連尊者というお弟子さんがいらっしゃいました。たくさんいるお弟子さんの中でも^{じんずう}神通第一といって、すぐれた神通力をもっておられました。ある日、その神通力を使って先に亡くなっておられたお母さんの様子を見たときのこと。お母さんが口にする物は、食べ物も飲み物もすべて炎となって燃え、炭になってしまい、何も食べられないでいました。お母さんは^{がき}餓鬼^{どう お}道に堕ちていたのです。その様子をご覧になった目連は、自ら食べ物や飲み物を差し出しますが、どうしてもお母さんを救うことができません。そこでお釈迦さまにお尋ねすることにしました。お釈迦さまは、「今日、7月15日というのは、修行僧が自らのこれまでの修行のありようを反省し、^{さんげ}懺悔する日である。そこで僧たちに供養をして、僧たちの徳の力をいただければ、母のみならず、父も親族も

盂蘭盆うらばんぼん



釈迦十大弟子の一人
目連尊者が神通力で
あの世を見てみると

亡き母が
餓鬼道に墮ち
飢えと渇きに
苦しんでいました



そして目連尊者が
神通力で食べ物を
供養しても

火となり燃えて
しまつのです

どうい
うこと
でしょう
お釈迦
さま



あなたの母は
自分の息子を
愛するあまり
よその子を不幸に
してしまつた

それゆえに
餓鬼道に
墮ちたのです



私のせいで母は
苦しんでいるの
ですか
どうしたら
よいのでしょうか？

七月十五日に九十日間の
安居（厳しい修行）を
終えた僧たちが集まる

彼らに
供養しなさい



目連尊者がお釈迦さま
から聞いた通り

僧たちに食べ物などを
供養しますと

たちまち目連尊者の
母は救われました



お釈迦さま
またこのように
すれば他の
餓鬼道の人たち
も救えますか？

そう
ですね



目連
彼らは
もう食えん

父母や祖先の恩に
感謝の気持ちを抱き
わが身を
ふりかえる期間、
それが
「盂蘭盆会」
なのです。

お盆の迎え方

まずは、ご先祖さまをお迎えするための棚を準備します。その棚を精霊棚といいます。専用の台もありますが、経机や飯台などを使用しても構いません。また、お仏壇から引き出すタイプの棚を使うこともあります。台や机、棚に真菰^{まこも}で編んだムシロを敷き、四隅には葉っぱのついた青竹を立て、しめ縄を張ります。そして、お位牌をお仏壇から出して安置します。



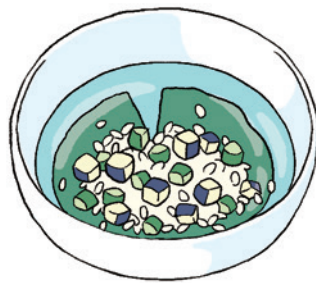
8

● お供えの仕方

次にさまざまなお供えものをします。

季節の野菜や果物・素麺・昆布・餅・赤飯・お膳・茶・湯などを供え、香を焚き、華を飾り、灯をともします。多くの地域では、精霊棚の手前側に「^{あ か み ず} 閼伽水」（清浄な水にミソハギなどを添える）、「水の子」（さいの目に切んだナス・キュウリに洗米を混ぜて蓮の葉の上に乘せ、水を満たした器に盛る）を供えます。

基本的な道具や飾りなどは、お盆が近づくと、スーパーやホームセンターなどの店先に並んでいたり、最近ではネットショッピングでも求めることができるようになってきました。



〔水の子〕

器に蓮の葉、ナスとキュウリをさいの目に切って、洗米を混ぜる
＊水を入れない地域もあります



〔閼伽水・ミソハギ〕

ミソハギを数本束ねて
浄水を入れた器に置く
＊ミソハギが無ければ
代用品でも構いません



〔盆の供花〕

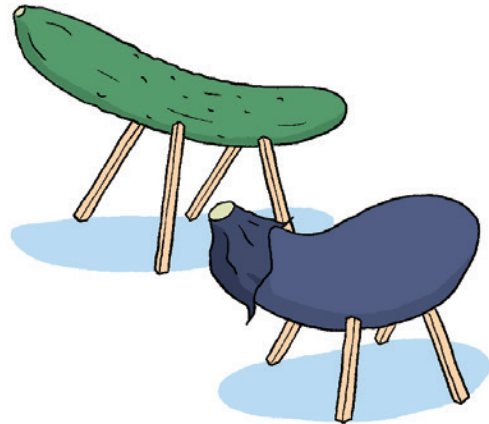
季節の花にホオズキを添えて
花瓶に入れる

● 精霊馬と精霊牛の作り方

お供えのキュウリとナスをそれぞれ馬と牛に見立てて、ご先祖さまの行き帰りの乗り物とします。これを精霊馬、精霊牛といいます。

キュウリが馬、ナスが牛です。馬は足が速いので、ご先祖さまがこちらに早くいらしていただけるように、牛はゆっくりと歩むので、あちらにごゆっくりお帰りくださいという気持ちでお供えします。

作り方を紹介しましょう。キュウリとナスをそれぞれ一個ずつ用意します。それぞれの四本の脚は、「おがら」（皮をはいだ麻の茎、麻がらとも呼ぶ）または割りばしを使用します。それらを適当な長さに切って、キュウリ・ナスに差し込んで脚にします。四本の脚がしっかりと安定するように調整しましょう。また、キュウリやナスは多少曲がっていますので、頭が上を向くようにするとよいでしょう。お子さんやお孫さんと一緒に作るのもいいですね。



● 提灯と灯籠

お盆には提灯と灯籠が欠かせません。そのわけは、ご先祖さまが自宅に帰って来られる家路を迷わないように目印として、また暗くなった足元を照らすためです。

軒先に吊るすタイプや精霊棚の脇に置くタイプなどがあります。また、オレンジ色の「ホオズキ」をお供えするのは、その色と形が提灯に似ているからだと言われています。

精霊迎えと精霊送り

全国各地でさまざまな精霊迎え（一般的には13日）・精霊送り（15日または16日）が行われています。

妙心寺では8月9日と10日の2日間、お精霊迎えの法要を、また8月16日にお精霊送りの法要を執り行います。



● 精霊迎え

精霊迎えは13日の夕方に行います。玄関先で「おがら」（麻がら）を折って積み重ねて焚き（これを「迎え火」と言います）、ご先祖さまをわが家にお招きします。火が焚けない場合は、提灯や灯籠がその代わりとなります。

● 精霊送り

お迎えした精霊の送り方には二種類の方法があります。一つは川や海に流すこと。もう一つは火を焚くという方法です。

前者はお盆のお供えを蓮の葉や真菰のムシロなどに包んで流します。昨今では環境への配慮から川や海に流すことができない地域が増えました。大きな行事としては長崎の精霊流しなどが有名です。

送り火は、各家の玄関先や庭で焚くものから、地域の大きな行事として行われるものまでさまざまなやり方があります。京都・五山の送り火は8月16日の夜に、奈良の大文字送り火は8月15日の夜に焚かれています。

お盆のお墓参り

お盆のお墓参りも大切な行事です。お盆の期間に入る前（8月13日からのお盆であれば8月12日まで）にあらかじめ掃除をしましょう。墓石を净め、草取りするなど周りをきれいにします。地域によってはお盆の支度を始める日「七日盆（7月7日または8月7日）」にお墓をきれいにしてお参りするところもあります。

お盆のお墓参り当日には、花立てに花を供え、水鉢には清浄な水を入れます。そして菓子や果物などをお供えしましょう。ただし鳥や動物が荒らすこともあるので、お参りが済んだら持って帰ります。以上のように準備をしたら、^{ろうそく}蠟燭を灯し、線香を立て、墓前に手を合わせ、お経を唱えましょう。

^{たなぎょう} 棚経

お盆の間、僧侶が各家に出向き、精霊棚の前でお盆のお経を唱えます。精霊棚の前で唱えることから棚経と呼び、『大悲呪』『開甘露門』などを^{どくじゅ}読誦します。地域やお寺によっては、仏間に上がらず、庭先や玄関先でお経を唱えることもあります。

棚経には、里帰りされたご家族ご親族皆さんお揃いでお参りをさせていただくのが理想的です。

和尚さんはお盆の数日間であくさんのお宅をお参りするから、とても忙しいよ。暑い時期だから、大変だね。

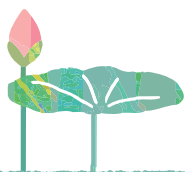


夏の風物詩といえば、盆踊りや花火ですね。実はご先祖さまの供養のために始まったとされます。

盆踊りの由来は、盂蘭盆会の行事として祖霊信仰の民間習俗と融合し、歌や踊りが演じられるようになりました。次第に太鼓や鉦^{かね}をたたきながら拍子をとって念仏や和讃などを唱えながら踊る「念仏踊^{ねんぶつおどり}」の流行も手伝って、先祖供養の踊りが一般化しました。さらに、稲の収穫を目前にした豊作祈願など、各地で多彩な盆踊りが生まれるようになりました。たとえば、岐阜県^{ぐじょう}の郡上踊り（重要無形民俗文化財）では、都合30日以上開催される盆踊りのうち、8月13日から16日にかけて「盂蘭盆会」と称して徹夜踊りをしています。

一方、花火大会は、江戸時代に鎮魂や慰霊を願って始められました。東京・両国の川開きの花火（現在の隅田川花火大会）は、飢饉や疫病による死者供養と災厄除去を願い、享保18年（1733）5月28日に催された水神祭での打ち上げが起源となったとされます。また、花火には迎え火や送り火としての役割があるという説もあります。





お施餓鬼(施餓鬼会)

季節の行事

施餓鬼会は、餓鬼に施す修行を通して、すべての存在が救われることを願う仏事です。またその功德によって先祖の供養を行います。主にお盆や春秋のお彼岸に行われています。

生前の悪行によって飢餓の苦しみの世界に^お堕ちた者を「餓鬼」と言います。餓鬼にはたくさんの種類がありますが、どの餓鬼も常にお腹がすいて、空腹の苦しみに悩まされています。このため餓鬼はどんなに求めても満たされることがありません。そういう意味では、ときどき私たちの心にも現われる鬼でもあります。

施餓鬼の由来

あるとき、お釈迦さまの弟子・阿難^{あなん}尊者の前に、口から火を吐く餓鬼が現れ、「お前は三日後に餓鬼道に堕ちて苦しむだろう」と言いました。驚いた阿難がお釈迦さまに相談したところ、お釈迦さまは「餓鬼たちにたくさんの食べ物や飲み物を施せば救われる」と教えました。その通りにすると、阿難自身だけでなく、餓鬼たちも救われました。その教えから、施餓鬼会が行われるようになりました。

施餓鬼会の参り方

施餓鬼会は、基本的にはお寺で行われます。

本堂や本堂の外縁に施餓鬼棚を設けて法要を執り行います。棚の上には「七^{しち}如来^{によらい}」の幡^{はた}を飾り、棚の中央には「三界万霊^{さんがいばんれい}」の位牌を安置し、海産物や季節の野菜などを供えます。やり方はさまざまですが、お寺に預かっている各家の位牌を

安置したり、先祖の戒名を記した塔婆を供養することも多くあります。

『開甘露門』『大悲呪』『観音経』などを読誦するのはお盆と共通しています。

施餓鬼は本来随時に行われるものでしたが、近年ではお盆に行われることが多くなりました。ただし、地域やお寺によって、春秋のお彼岸に合わせたり、他の時期に行う場合もあります。詳細については菩提寺にお尋ねください。

みずむ 水向け

施餓鬼会では、施餓鬼棚の前で「水向け」というお参りの仕方をします。ミソハギや櫛などでお供えや卒塔婆そとうばに向けて浄水をかけるものです。

施餓鬼棚のお供えや水向けでの浄水によって、飢え苦しんでいる餓鬼たちに飲食を施します。こうすることで、餓鬼たちは空腹を満たし、喉の渇きを潤すのです。

餓鬼は欲望の炎を吐きながら、私たちの心の中にも現れます。あれが欲しいこれが欲しいという欲望の炎を消すには水が必要です。食べ物を供え、水をかける功德は、餓鬼の炎を消し、ご先祖さまの供養になるのに加え、自分自身の心に生じた餓鬼も救ってくれるものです。

【開甘露門】かいかんろもん

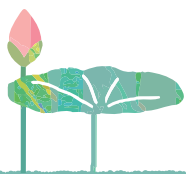
『開甘露門』は施餓鬼の際に読誦されるお経で「若人欲了知じゃじんにゆりようし～」で始まります。皆さんも耳にされたことがあるでしょう。別名『大施餓鬼』とも呼ばれます。

このお経の中には数々の素晴らしい教えが説かれています。たとえば「存者そんしゃ福楽寿無窮 亡者離苦生安養」という一節があります。訳しますと、「生存している者は幸福安楽で寿命は無限、亡くなった者は餓鬼の苦しみを離れて安養（極楽）に生まれる」という意味になります。施餓鬼の功德によって「生ける者すべてが幸せになり、ご先祖さまはみな極楽浄土に行ける」と教えているのです。

お盆と施餓鬼は似ており、混同されやすいものです。「餓鬼」というキーワードが共通していることも理由の一つです。目連尊者が餓鬼道に堕ちた母を救おうとしたのがお盆で、阿難尊者が餓鬼に施しをしたのが施餓鬼です。施餓鬼はお盆に限らず、お彼岸やその他の行事と合わせて行われることも多くあります。

お盆にせよ施餓鬼会にせよ、どちらも「先祖のための供養」であると同時に「自分のための修行」でもあります。ご先祖さまを供養することを通じて、自身自身の心も養われるのだ、と受けとめたいものです。





お彼岸（彼岸会）

季節の行事

彼岸会は年に春・秋の2回、それぞれ春分の日・秋分の日を中心にその前後3日ずつを含めた7日の間に行われる仏教行事です。初日を「彼岸入り」、春分・秋分の日を「お中日」、最終日を「彼岸明け」と言い、今日ではこの7日間を通して「お彼岸」と呼ばれ、親しまれています。この期間中に先祖供養のための法要や、お墓参りなどが行われます。

由来

● 彼岸とは

お釈迦さまはその教えを川の様子にたとえて説かれることがありました。川のこちら岸からあちら岸へ流れを越えて渡るように、私たちは苦しみ（此の岸）から安らぎの世界（彼岸）へ到らなければならない。ここから私たちが今生きる悩み多きこの世を此岸、目指すべき悟りの境地を彼岸と呼びます。

● 彼岸会のはじまり

このお彼岸、実は日本独自のものです。古くは平安時代初期、延暦25年（806）の記録に桓武天皇が亡弟・早良親王の鎮魂のために春・秋の2回、7日ずつ法要を執り行ったとあります。それがしだいに公家や武家を経て広く社会に浸透し、恒例の仏教行事として定着していきました。

● なぜ春と秋に行われるのか

春分・秋分の日は古くから縁起のよい日とされていました。加えて両日ともに太陽が真東から登り、真西に沈みます。西の彼方には阿彌陀如来の国、極楽浄土があるとされます。西に沈む夕日を見ながら、遥かな浄土にいるであろうご先祖さまをはじめとする亡き人を想い、感謝するにふさわしい日なのです。また昼夜

の時間が等しくなるように太陽が動くことを、お釈迦さまが悟られた真理
ちゅうどう
「中道」とも結びつけられます。中道とは、偏らずとらわれない生き方です。その実践に取り組むにふさわしい期間でもあるのです。

お彼岸の過ごし方

お彼岸の7日間の内、お中日には先祖供養のためにお寺参りやお墓参りをして、おかげさまで自分自身が今あることを感謝するとともに、亡き人のためにも正しく生活することを誓うのが良いでしょう。そして、この期間は正しく生活するための6つの行い「六波羅蜜」ろくはらみつを心がけ、1日ひとつずつ積み重ねていく大事な機会ととらえましょう。お彼岸は、私たちの大切な修行期間なのです。

● お彼岸は修行期間

日常生活の中でもできる修行、それが六波羅蜜です。

- ① ふせ 布施波羅蜜：おかげさま・おたがいさまと何でも惜しみなく分かち合います。
- ② じかい 持戒波羅蜜：仏教徒としての決まりを守るようつとめます。
- ③ にんにく 忍辱波羅蜜：苦難を受け止め辛抱し、怒りの心を起こしません。
- ④ しょうじん 精進波羅蜜：自分を励まし、努力をします。
- ⑤ ぜんじょう 禅定波羅蜜：どのようなときでも心の静けさをたもちます。
- ⑥ ちえ 智慧波羅蜜：なにものにもとらわれない心に安らぎがあると気づきます。

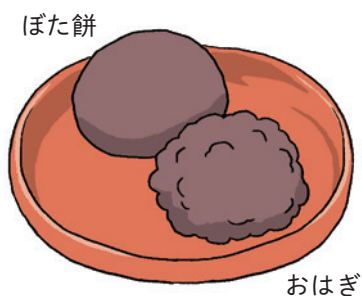
仏教の修行とは特別な方法があるわけではないのです。日々の暮らしの中でこの6つを心がけて精一杯過ごすことにより安らかな心、彼岸へと導かれます。

【波羅蜜】はらみつ

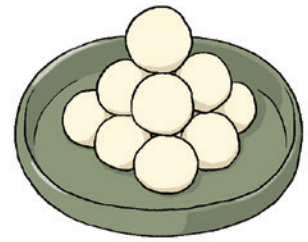
どのようにして悟り、すなわち安らぎの世界へ渡るのか？そのための方法を「波羅蜜」あるいは「波羅蜜多^{はらみつた}」と言います。これは古代インドの言葉「パーラミター」をその音のまま漢字に当てはめたもので、翻訳すれば「彼岸に到る（＝^{とうひがん}到彼岸）」となります。お彼岸には6種類の波羅蜜（六波羅蜜）を実践します。また、私たちが日頃お唱えするお経『般若心経』は、正しくは『摩訶般若波羅蜜多心経^{まかはんにやほらみたしんぎょう}』と言い、「波羅蜜多」の文字が入っています。その意味は「大いなる（＝摩訶）智慧（＝般若）によって悟りに到る（＝波羅蜜多）大切な教え（＝心経）」です。『般若心経』をお唱えして学ぶことも、彼岸へ到る実践となります。彼岸に到る道はお彼岸に限らず常に開かれているのです。

● お彼岸のお供え

お彼岸のお供えとしてよく知られるのは、ぼた餅とおはぎです。多くの場合、季節の花に合わせて、春にはぼた餅（牡丹餅）を、秋にはおはぎ（御萩）をお供えします。一般的にぼた餅はこしあん、おはぎは粒あんとされますが、その理由として秋は小豆が収穫したてで柔らかく皮も苦にせず食べられますが、春には皮がかたくなってしまうために取り除いたという説があります。



また彼岸団子として小さく丸めたお団子をお供えすることもあります。いずれにしても昔は高価であった砂糖やお米をふんだんに使ったお供えを用意したのは、ご先祖さまを心からもてなすための気持ちの表れです。どんなものをお供えするにしても思いやりの心を持って届けたいものです。



彼岸団子の作り方〈一例〉

1. 上新粉（米粉）に水を加えながら練り混ぜる。
2. ほどよいかたさ（耳たぶ程度）になったら手にとって丸める。
3. 丸めた団子を熱湯でゆでる。団子が浮いてしばらくしたら冷水に移す。
4. 冷水で粗熱をとったら水気を切る。
5. 山型に重ね上げる。

これで完成です。お供えのお下がりはいたらし餡や餡子にからめると美味しくいただけます。

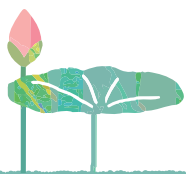
とっても簡単！
蒸してもおいしいよ♪
みんなも作ってみてね。



コラム

彼岸会は誰のために？

お彼岸は単に先祖供養のためだけの期間ではありません。自分自身を振り返り、自分も周りの人たちにとってもよりよい日々を送るための大切な機会です。亡き人たちと向き合い、果たして彼らは今の自分をどう見ているのかと想いを馳せることが彼岸を過ごす第一歩となります。お彼岸をきっかけに毎日の生活の中でも六波羅蜜の実践をしていきましょう。



お お み そ か

大晦日・正月

季節の行事

年末行事

年末大掃除

過ぎ去ろうとしている1年間の^{すす}煤を払い、新たな気持ちで新年を迎えます。掃除は誰かを迎えるときにすることが多いですね。年末の大掃除は親類やお客さんを迎えるためでもあり、神仏を迎えるためでもあります。それと同時に新鮮な自分自身を迎えるためのものにもなっています。

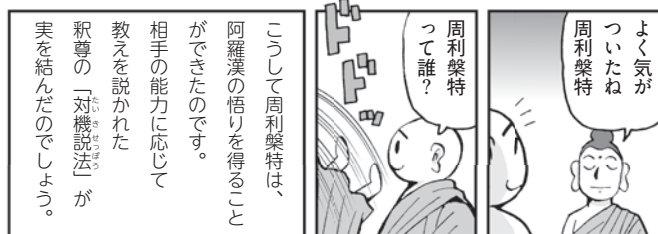
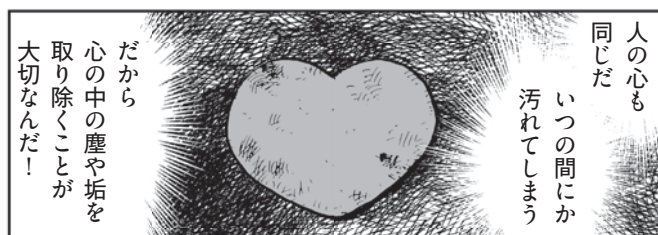
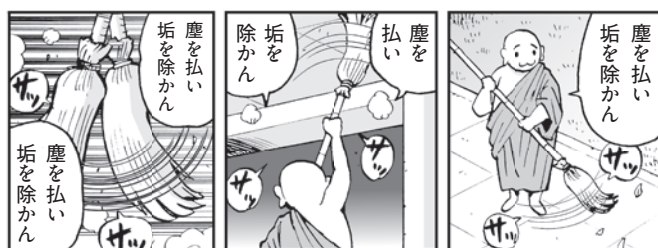
掃除の由来

お釈迦さまの弟子に周利槃特^{しゅりはんどく}というお坊さんがいました。自分の名前も覚えられないほど物覚えの悪い彼に、お釈迦さまは1本のほうきを渡し、とにかく掃除をするように言いました。周利槃特は「我^{ちり}塵を払わん、我^{あか}垢を除かん」（『根本説一切有部毘奈耶』巻31）と唱えながらひたすら掃除を続けるうちに、塵や垢とは自分の執着心のことだったと気づき、悟りを開いたといわれます。つまり、掃除は目で見える汚れを取り除くだけでなく、心の汚れやくもりを除いて、「気づき」を得ることにもなるのです。

年末大掃除の仕方

手の届きにくいところなど、普段できない場所をこの機会に掃除してみましょう。家の中の掃除だけでなく、庭木の手入れや洗車などをするのもいいかもしれません。とにかく一心に掃除してみましょう。

塵を払い垢を除かん



年末行事

じょ や 除夜の鐘

「除夜の鐘」は、大晦日の夜に寺院の鐘をつく日本仏教の行事の一つです。
除夜とは大晦日の夜のことを指します。

除夜の鐘の由来

その歴史は古く、もともとは中国・宋の時代の末期頃に始まった鬼払いの文化で、日本には鎌倉時代の頃に伝わったといわれています。室町時代には仏教行事として一般化され、江戸時代には多くの寺院で行われていたようです。

人間にある108の煩悩を除くことを願って、108回つくといわれています。

また、鐘の音は仏さまの音や声を連想させるものであり、その響きを聴く者は一切の苦から逃れ、悟りに至る功德があるとされています。

鐘のつき方

大晦日の晩、どこかの鐘の音が聞こえてくるかもしれません。家にいながら静かに耳を澄ましてみましょう。また、寺院に参拝すればその様子を見ることができたり、参拝者自身が鐘をつくことができる場合もあります。まずは寺院に問い合わせしてみましょう。



煩惱はなぜ 108 なの？

煩惱が108個あるといわれる由来には諸説あります。そのいくつかをご紹介します。

● 「六根」×「苦・楽・捨」×「浄・染」×「三世」

「六根」とは人に感覚を生じさせ、迷いを与えるものになるもののことで、眼・耳・鼻・舌・身・意の6つを指します。その感覚から出た感情は「苦・楽・捨」に分けられます。苦＝不快、楽＝快感、捨＝どちらでもない、というあり方です。そしてそれぞれ浄＝きれい、染＝きたないと分けられます。「三世」は過去・現在・未来や前世・今世・来世を表します。これらすべての組み合わせが、六根(6)×苦・楽・捨(3)×浄・染(2)×三世(3)=108となります。

● 暦

月の数(12)+二十四節気(24)+七十二候(72)を足すと108。気候や季節の変わり目を表す暦に由来しているという説です。

● 無数を表す数である8

やおよろず うそはっぴやく
たとえば八百万や嘘八百など、日本では古来、数えきれないくらい多いものを指すときに数字の8を使って表すことがあります。

108個ある煩惱を、鐘を一つ鳴らすごとに一つずつ消していきませんが、そこには来年こそは幸せな一年を過ごしたいという願いが込められているのです。

し く (4×9) と は っ く (8×9) を
足した数が108という説もあるよ。



お寺のお正月

しゅ しょう え 修正会

正月の元旦から三日間、十六善神じゅうろくぜんじんの画軸を掛けて大般若祈祷だいはんによきとうの法要が行われます。新年にあたって、旧年の悪い行いの穢れを清め、1年間の天下泰平や五穀豊穡ごこくほうじょう、檀信徒の無病息災などを祈るとともに、あわせて自己の修行の成就を誓います。修正月会ともいわれます。

【大般若祈祷】だいはんにゃきとう

『大般若經』てんどくを転読する祈祷で、正月だけでなく、節分や建物の新築を祝う落らっ慶けい法要などでも行われます。『大般若經』とは、今から1300年以上前に中国唐代の三蔵法師である玄奘さんぞうが16年の旅をして經典をインドから持ち帰り、その後4年を費やして翻訳したという般若系經典の大全集で、その数は600巻もあります。この膨大な經典を完全に読誦どくじゆするには何日もかかってしまうので、「転読」という方法でお唱えします。転読とは、扇をひらくように經本をパラパラと繰りながら陀羅尼だらにを唱えるもので、これによって全巻の読誦に代える誦み方のことです。チベットのマニ車ぐるまも經文が書かれた筒を回すことで、誦むことに代えています。転読の際には特に巻578の「理趣分」りしゆぶんが大切にされ、その中の「降伏一切大魔ごうぶくいつさいだいま最勝成就さいしょうじょうじゆ」という文句を一巻ずつ転読した終わりに唱えます。

この祈祷では魔除けと同時に五穀豊穡や無病息災などを祈ります。祈祷の時には「般若札」はんによふだと呼ばれるお札を十六善神の前にお供えし、災厄を追い払うお札として法要後、檀信徒に配布します。



【十六善神】じゅうろくぜんじん

大般若の祈祷の際に掛けられる画軸があります。ここにはお釈迦さまを取り巻くように、姿かたちが醜怪な夜叉^{しゅうかい やしゃ}や鬼神^{きじん}が左右に並んでいます。『大般若経』を守護する護法神である十六善神です。もとは悪神ですが、改心して善神となりました。

姿は恐ろしく威圧的ですが、仏法とそれを信じる人たちを護るありがたい仏さまです。



修正会 Q & A

Q 修正会は参加できる？

A 禅寺ではお正月に行われるのが一般的ですが、日時などはお寺によって異なります。参列できない場合もあるので、まずは菩提寺に問い合わせてみましょう。

Q お札（般若札）をいただきましたが、どうすればいいの？

A 無病息災などを祈祷したお札です。魔除けに玄関に貼ったり、仏壇の脇に貼ったりとさまざまです。そして、いずれお札が古くなったらお焚き上げを行っているお寺もありますので、菩提寺の和尚さんに聞いてみましょう。

お正月には達磨^{かけじく}の掛軸

禅宗の寺院では、お正月には床の間に
だるまだいし
達磨大師が描かれた掛軸を掛けます。達
磨大師は、禅宗の初祖と呼ばれるインド
のお坊さんです。お釈迦さまから数えて
28代目として仏法を^つ嗣いだお坊さんで、
インドからはるばる海を渡って中国に禅
を伝えました。(達磨大師P49～50参照)

その達磨大師の教えに「^{じきしにんしん けん}直指人心、見
^{しょうじょうぶつ}性成仏」があります。「心をズバリ指
し示し、自分の心が仏の心にほかならな
いことを自覚する」という禅の最も大切
な教えです。

お正月に一般の家で床の間に祀られる
のは神様ではないでしょうか。その場所
に、本心の自覚を教えとする達磨大師の
軸が掛けられるとは、まさに禅寺ならで
はでしょう。ご家庭でもお祀りしてみて
ください。



達磨図（列祖像のうち）狩野常信筆
妙心寺蔵

お正月に家庭で行われる仏事

あい さつ 挨拶

「挨拶」の語源は、禅の言葉からきているといわれます。「挨」は“押す”、「拶」は“迫る”で、問答を交わして相手の悟りの深さを確認することをいいます。つまり相手と心を通じ合わせるという意味があります。新年始めの挨拶は、互いに心を通じ合わせる大切な行事といえます。

● 新年の挨拶

ご家庭では家族が顔をそろえ、旧年を振り返りながら、新年の挨拶をしたり、抱負を述べたりします。また、近隣の家々を回り、旧年のお礼と年始めの言葉を交わします。遠方の方への年賀状も挨拶の一環です。普段からお世話になっている人はもちろんのこと、ご無沙汰している方への挨拶も新しい年にふさわしいものでしょう。

● はつもうで 初詣（菩提寺への挨拶）

菩提寺のご本尊さまにお参りします。門をくぐる時は一礼をし、本堂正面で手を合わせます。香炉があれば線香を焚いても構いません。もし和尚さんに会ったら新年の挨拶をいたしましょう。

● 仏壇・墓参り（ご先祖さまへの挨拶）

年末にはお仏壇やお墓の掃除を済ませ、新年には鏡餅などをお供えしてご先祖さまに挨拶をします。

食事前の挨拶「いただきます」



お正月には、おせちやお雑煮をいただく方が多いでしょう。

おせちは山や海の恵みを工夫して作り、お雑煮は神仏やご先祖さまにお供えしたお餅のお下がりであるともいわれます。禅寺では、お正月に限らず食事をする際、「食事五観文^{ごかんもん}」を唱えます。年初めの「いただきます」でお唱えしてみませんか？

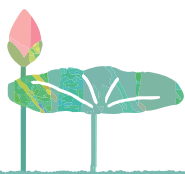
食事五観文

一つには、^{こう たしょう はか か らいしょ はか}功の多少を計り彼の来処を量る。
 二つには、^{おのれ とくぎょう ぜんけつ はか く おう}己が徳行の全闕を付って供に応ず。
 三つには、^{しん ふせ とがとんとう はな しゅう}心を防ぎ過貪等を離るるを宗とす。
 四つには、^{まさ りょうやく こと ぎょうこりょう ため}正に良薬を事とするは形枯を療ぜんが為なり。
 五つには、^{どうぎょう じょう ため じき う}道行を成ぜんが為にまさにこの食を受くべし。

----- (意識) -----

- 1つ、すべてのものに感謝してこの食事をいただきます。
- 2つ、自分の日々の行いを反省してこの食事をいただきます。
- 3つ、欲張ったり残したりしないでこの食事をいただきます。
- 4つ、身体と心の健康のためにこの食事をいただきます。
- 5つ、みんなが幸せになるよう努力するためにこの食事をいただきます。

私たちが生きているのは、多くの命に支えられているおかげだという感謝と敬意をもって、新年の食事をいただきましょう。



葬送儀礼

通年の行事

葬送儀礼は、故人を弔い送るために「枕経^{まくらぎょう}」、「通夜^{つや}」、「葬儀」という3つの行事の流れで執り行われます。喪主になることはめったにありませんから、こうした弔事に慣れている方はほとんどいません。まずは、菩提寺に連絡して、どのように進めていくかを相談し確認してください。

枕経

枕経は、遺体の枕元で読経することをいいます。遺体を安置して、「枕飾り」と呼ばれる小さな祭壇を設けます。そこで菩提寺の住職が読経し、遺族はお参りします。

枕経の由来

元々は、臨終間際の人の中に平穏をもたらすために行われました。古来伝わる風習には、納棺^{のうかん}（遺体を棺に納めること）に先立って、故人に寄り添い終日読経するという場合もありました。

故人の体は清められ、白装束に着替えをして化粧がほどこされ、頭を北に向けて寝かせられます。これは「北枕」と呼ばれ、お釈迦さまが亡くなられる時に北の方角へ頭を置いて、西向きに横になられた「頭北面西^{ずほくめんさい}」が由来とされています。

【枕飾り】まくらかざり

小さい机に白い布をかけ、香炉に線香を立て、白菊などの花、蠟燭^{ろうそく}を配し、湯飲みには水を入れ、茶碗にご飯^{たむ}を盛って真ん中に箸を立てる「一膳めし」を供えます。

【末期の水】まつごのみず

遺族が故人に最期の飲み水^{たむ}を手向けます。「死に水をとる」ともいいますが、ガーゼや常緑樹の葉などを濡らし、口元を潤します。

通夜

通夜は、遺族をはじめ縁者が集まり、夜通し故人を偲び、付き添うことです。葬儀の前夜に執り行われるのが一般的です。読経や法話などが終わると、遺族は会葬者に飲食を振る舞い、蠟燭や線香の火を絶やさないようにして故人を見守ります。

通夜の由来

お釈迦さまはお亡くなりになる前に、弟子の阿難尊者^{あなん}から「師が亡くなられてしまったら、私たちは何を頼りに生きていけばいいのでしょうか」と問われて、「他にすぎるのではなく、自己をよりどころとし、法（仏の教え）をよりどころとし、修行に励みなさい」と、伝えました。

そこで弟子たちは、お釈迦さまを偲んで、自分たちがいただいた教えについて夜通し語り合った、といわれています。

通夜の参り方

読経が始まってほどなくすると、参列者は喪主から順に焼香へと進みます。

焼香は、故人のために行うだけでなく、焼香する人の心身の^{けが}穢れを取り除き、清浄なる心でお参りするための作法ともされています。焼香する回数や所作は、地域の風習やその場の状況によっても異なってくるので、決まった形式はありません。ただ、姿勢を正し、心を込めて香を献じることが大切です。

一例を紹介すると、左手に数珠を掛けて、右手の親指と人差し指と中指で抹香をつまみ、燃えている香炭の上に静かにのせます。焼香した後は、仏前に向かって合掌礼拝します。

コラム

夜通し故人を偲ぶことが供養に

生かされている人たちの心の中には、故人の元気な頃の姿や、声や言葉が今も息づいているのではないのでしょうか。たとえ大切な人の命が失われてしまったとしても、その人とのつながりやご縁が消え失せて無くなることはありません。お釈迦さまの教えが2500年の長きにわたって受け継がれ、現代を生きる私たちの元にも届いていることが、その証といえるでしょう。

「通夜」とは、「夜を通す」と書きます。お釈迦さまの遺した教えについて、弟子たちが語り合っているうちに、気がつけば夜が明けていました。故人とともに過ごす最後の夜には、故人とのご縁を大切にし、思い出話に花を咲かせましょう。その花を手向けていただくことが、何よりの供養になるのではないのでしょうか。

葬儀

葬儀は、故人との別れの儀式であるとともに、仏弟子としての旅立ちを見送る儀式でもあります。故人は、葬儀によって迷いの世界から安らかな仏の世界に赴くのです。菩提寺の住職が導師を務め、鳴らしものやお経を担当する数名の役僧が補助する形で執り行われます。

禅宗の葬儀の特徴は、故人に仏弟子となるための戒律を授ける「授戒^{じゅかい}」と、悟りの世界へと導く「引導^{いんどう}」の儀式にあります。

また、祭壇の中央には、戒名などを記した白木の位牌が安置されます。

【戒名】かいみょう

今日では生前に戒を受ける機会が少なくなり、死後に与えられることが多くなったので、亡くなってからの名前だと思われることが多いようです。しかし、本来そうではありません。戒名とは、授戒^{じゅかい}会や得度式に参加して戒を受けられ、仏弟子となった名前のことをいうのです。

【位牌】いはい

故人の戒名と没年月日、生前の名前、享年^{きやうねん ぎやうねん}（行年）が記された木の札のこと。自宅の仏壇や寺に安置し、故人を祀ります。葬儀の際には、白木の位牌に墨書きされ、四十九日の忌明け、もしくは一周忌までの間、仮の位牌として用いられます。（白木の位牌の使用期間には地域差があります。）

おもて面^{うもてめん}の上部、戒名の頭の方には「新帰元^{しん きげん}」と書かれます。これは「新たに元に帰る」という意味で、故人はこの世に命をいただき、この世を去って、新たに本源の世界・仏の元に帰っていくのです。（そのほか、「帰真^{きしん}（真実の世界に帰る）」や「早逝^{そうせい}（早くに逝去する）」と書く場合もあります。）

【享年／行年】きょうねん／ぎょうねん

「享」は、「受ける」、「いただく」の意味で、「享年」はこの世で受けた年月をいいます。「行」は経過の意味で、「行年」はこれまで生きてきた年数を指します。一般的には、いずれも数え年で表記します。

●式次第

(1) 剃髮偈^{ていはつげ}

カミソリで頭髪を剃る仕草をし、偈（仏の教えを韻文形式の漢詩で表したもの）を唱えます。剃髮は、煩惱を断ち切ることを意味し、仏弟子となる証です。ここから涅槃^{ねはん}（煩惱が消え去った安らかな悟りの境地）に入る第一歩を踏み出します。

(2) 懺悔文^{さんげもん}

懺悔とは、自らの犯した罪を悔い、赦^{ゆる}しを乞うことです。サンスクリット語の音写である「懺摩^{さんま}」と、その意味である「悔」（過ちを悔い改める）が合わさった言葉です。三毒^{さんどく}【貪（むさぼり）・瞋（怒りや憎しみ）・痴（愚かさ）】といわれる煩惱を取り除き、清らかな心になってこれからの行いを正していく、という内容の文言です。

(3) 三帰戒^{さんきかい}

「三」とは、三宝^{さんぼう}（仏・法・僧の三つの宝）を指します。悟りを開き、涅槃に到った者を「仏」、その教えを「法」、そして、仏法を学び修行をする人たちのことを「僧」といいます。「帰」とは、三宝に帰依^{きえ}する（心から敬い、信じる）ことです。「戒」とは、仏弟子が自らを戒めるために課す規範であり、「習慣」という意味に近いといわれています。三帰戒を唱え、仏弟子として正しいあり方を誓い、自らを戒めるのです。

(4) 龕前念誦^{がんぜんねんじゆ}

「龕」とは、棺のことです。棺の前で、悟りの世界^{おうじょう}に往生することを願う言葉を唱えます。この世の出来事は無常で、閃^{ひらめ}く雷のようなものであり、

この世を去れば安楽で、穏やかな大海のようになる、と説きます。そして、故人の冥福を祈り、諸仏・諸菩薩を讃える『十仏名』を唱えます。

(5) 鎖龕・起龕回向

鎖龕の「鎖」は閉鎖の意味で、棺の蓋を閉じることです。『大悲呪』を讀誦し、鎖龕の回向文を唱えます。起龕とは、棺を起こして送り出す、という意味です。鎖龕と同じく『大悲呪』を讀誦し、起龕の回向文を唱えます。

(6) 打ち鳴らし

葬儀に出頭している役僧が『往生呪』を唱えながら、引磬（持ち手の付いたリンのこと。金属製の細長い棒で打ち鳴らす）、太鼓、鐃鉢（シンバルに似た鳴らしもの。鉢と鉢が擦れ合う音を長く響かせる）などを打ち鳴らします。チーン・ポーン・ジャラーンと荘厳な音が鳴り響く中、故人を送り出します。式場から移動するわけではありませんが、もともとは棺を墓地もしくは火葬する場所まで移動する野辺送りの際に鳴らしていました。

(7) 引導法語

導師により、故人の生涯や徳行が述べられ、仏道修行に励んだ功績が讃えられます。そして、仏法を説き、故人を迷いの世界から悟りの世界に導くのです。臨済宗では、導師が松明（火葬）もしくは鍬（土葬）をとって法語を唱え、一喝するという形をとります。

黄檗希運禪師の逸話には、川で溺れて亡くなってしまった母親の成仏を願い、川に松明を投げ入れた、とあります。この逸話から、この世の未練や迷いを断ち切るように、松明を投げるようになった、ともいわれています。

また、「喝」は、「臨済の喝、徳山の棒」といわれるように、臨済宗において特に使用されています。本来は、叱咤する声ですが、言語を用いて説くことのできない禅の教えを端的に示し、煩惱が消え去った涅槃へと故人を導きます。

(8) 荼毘諷経・焼香・荼毘回向

『観音経』や『楞嚴呪』などのお経が唱えられ、導師・役僧が焼香した後、喪主・親族・会葬者の順に焼香します。一般的に、引導法語までが葬

儀で、その後からが告別式とされ、読経の前に弔辞や弔電の読み上げが入る場合もあります。

焼香が終わった後、荼毘（火葬）に付する回向文が唱えられます。これは、遺族や参列者が荼毘に付される故人と心の中で最後の別れを告げるという意味を持っています。

コラム

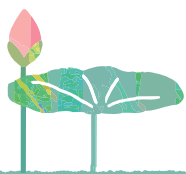
生まれてくことと亡くなること

何もないところからパッとこの世に誕生する人がいないのと同じように、亡くなったからといって何もかもが無くなるということはありません。

私たちの命は、さまざまご縁によって授かり、^{とつきとおか}十月十日お腹の中で成長し、家族や周囲の人たちに見守られながら、育まれてきました。家族だけでなく、社会の多くの人の手を借りてこの世に生まれてきたのです。それらすべてが尊いご縁であり、いずれも欠かすことはできません。そうして授かった尊い命に名前をいただいて、人生が始まります。

「人が生まれてくことと、人が亡くなることというのは、とてもよく似たご縁の中にあるのではないだろうか」と、ふと感じることがあります。亡くなる時も同じように、仏弟子としての戒名が授けられ、遺族や葬儀にまつわる多くの人の手を借りて送り出されます。その後、忌明けする四十九日までの間、遺族は^{しょうじん}精進の期間を過ごすのです。それは、お腹の中の赤ちゃんが無事に生まれてくることを願って、周囲の人が襟を正して生活する姿にも通じるのではないのでしょうか。

葬儀は、故人のためだけに行われるものではありません。葬儀を通じて、自らがいただいたご縁に気づき、今ある命に感謝し、故人の冥福を祈りながら日々を暮らしましょう。



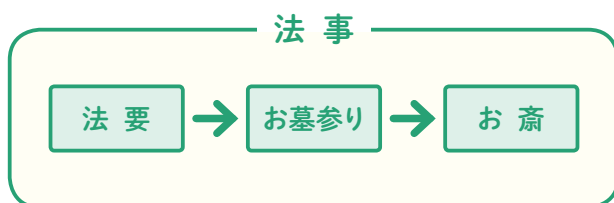
法 事

通年の行事

法事とは本来、すべての仏教行事を意味していましたが、現在では故人の冥福を祈り、善行を行う追善供養を「法事」と呼んでいます。法事は、供養するとともに故人を偲び、感謝の心を捧げる、命日などに行う大切な仏事です。

法要と法事

故人の冥福を祈って供養を行う儀式のことを「法要」といいます。法要後に僧侶や参列者に対して感謝の気持ちを込めて会食の場（お^{とき}斎）を設けます。このお斎までを含んだ一連の行事を「法事」といいます。



【供養／追善供養】くよう／ついぜんくよう

物品や善行を施すことが「供」であり、真心をこめて敬うことが「養」であります。また、お釈迦さまや観音さま、ご先祖さまなど尊敬するものを対象として法要を営むことも「供養」と呼ばれます。

追善とは、故人が生前に尽くせなかった善行を、遺された者が亡き人に代わって行い^{えこう}回向（功德をふり向ける）することです。それが故人の冥福となり供養になると考えられました。故人に対しての追善供養は、葬送の儀式から始まり、葬儀とその後の法要は、故人の冥福のみならず、遺された者の哀しみを癒やし、その苦悩からの立ち直りにつながる行事でもあります。故人に対する追善供養を通

し、故人と向き合うことで哀しみを和らげてくれることでしょう。

【回向】えこう

回向とは、「回^え転^{てん}趣^{しゅ}向^{こう}」の略で、自らが修めた供養の功德を、自分のためだけでなく、他に回^{めぐ}らせるという意味です。仏事法要の時に唱えられる回向文は、その供養の目的や内容が具体的に書かれています。例えば、自らの修行の成就や国の平和、先祖の冥福などです。自分が幸せになるだけでなく、同時に他者にも幸せが及ぶようにすることが、仏教の大切な教えなのです。

コラム

供養は自分も養う

故人の供養を丁重に行うことは、そのまま自らを養い、禅の修行をさせていただいていることになります。供養によって養われた尊い心をもって日々の生活を送ることで、幸せな毎日となることでしょう。供養は故人のためだけの行いではなく、遺された私たちを幸せに導く、私たちのための行いでもあるのです。

法要の種類

● 中^{ちゅういん}陰法要

「中陰」とは、人が亡くなってから次に生まれ変わる間の存在を意味します。

中陰の期間は、七七日を期限とした「満^{まん}中^{ちゅう}陰^{いん}」の法要が一般に執り行われているように、四十九日間と考えられています。インドでは、亡くなった人は七日おきに生まれ変わるチャンスがあり、七回目の四十九日までに必ず生まれ変わると考えられていました。そのため、葬儀の後、七日ごと（初七日・二七日…）に故

人の冥福を祈る法要を行い、四十九日の満中陰法要をもって、白木の位牌から新調した本位牌に替え、お墓への納骨を行い、忌明けとする地域が多く見受けられます。(位牌の入れ替えや、納骨の時期は地域によって異なります。)

故人のために七日ごとに供養に励むことは、故人だけでなく自分自身も養われていき、別離の苦しみや哀しみから前に進む力を得ることになります。

●百ヶ日法要

人が亡くなって百日目に行う法要のことをいいます。この法要は「卒哭忌^{そっこくき}」とも呼ばれ、遺族が大切な人を亡くした嘆き哀しみを卒業する日という意味があります。

●年忌法要

年忌法要は、法要の供養で得られた功德を回向して、故人の冥福を祈るために行われます。一周忌より一定の年数の間隔を空けて特定の故人に対して行う仏事で、一般的に現代の日本では法事と呼ばれ、下記のような年忌法要が営まれています。

- 一 周 忌 …………… 亡くなられて1年目に行う 儒教の「小祥^{しょうしょう}」にあたる
- 三 回 忌 …………… 亡くなられて2年目に行う 儒教の「大祥^{だいしょう}」にあたる

(以下「回忌」はすべて「数え年」で行います)

- 七 回 忌 …………… 七七日の聖数である七に拠る 干支の半分の年
- 十三回忌 …………… 干支が一回りした年
- 十七回忌 …………… 聖数である7に拠る 三十三回忌の半分の年
- 二十三回忌 …………… 地域の習慣によって営む
- 二十五回忌 …………… 干支が二回りした年 十七回忌と三十三回忌の中間地点
- 二十七回忌 …………… 地域の習慣によって営む
- 三十三回忌 …………… 観音さまの三十三身の変化数に拠るとされる
- 五十回忌・百回忌 … 故人の徳を顕彰する意味から遠忌^{おんき}(遠諱^{おんき})として50年ごとに営まれる

年忌法要を行うにあたっては、菩提寺の住職と日時や場所の相談を行った後に、参列していただく方に案内をします。法要当日までにお墓の掃除を行い、当日はお供え物などを忘れずに準備しておきましょう。

法事の仕方

● 法事の準備

- ① 菩提寺の住職に法事を行う日時や場所を相談します。
- ② 日時や場所が決まったら、参列者に案内状を出します。日時と会場、会食の有無を明記し、出欠の返信葉書を同封します。参列者が少数の場合は電話連絡でも構いません。
- ③ 引き出物の準備と当日のお茶菓子やお斎（会食）をどのように行うかを決めます。
- ④ お布施についてお悩みの場合は住職にお尋ねください。

● 法事当日の流れ（一例）

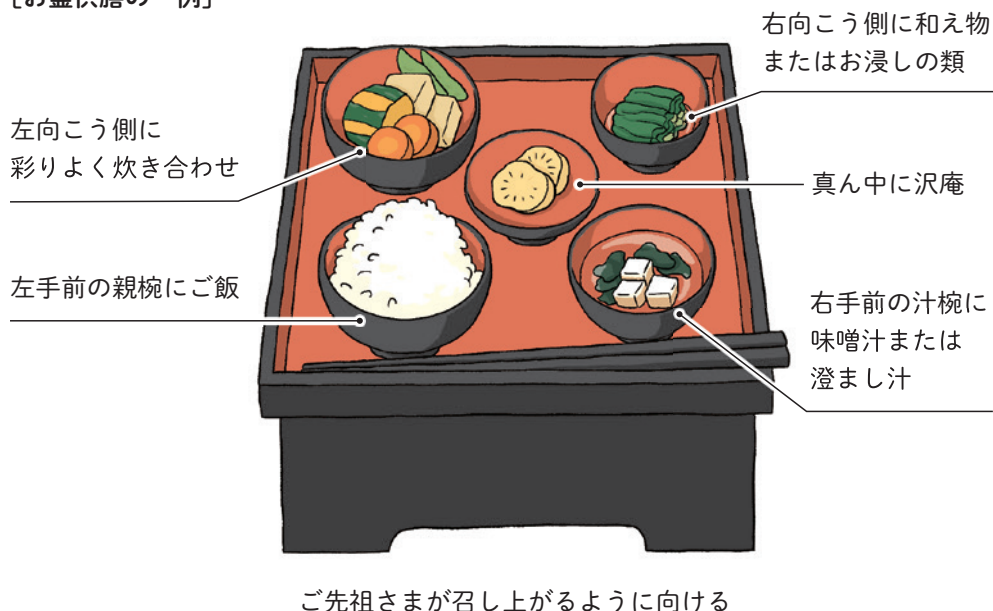
- ① 参列者が集まる前に、施主はお供え物など忘れ物がないか確認します。
- ② 参列者が集まり法要が始まります。
- ③ 法要終了後、お墓参りを行います。
- ④ お墓参りの後、お斎を設け、参列者一同で食事をいただきます。

【お斎】おとき

お斎は仏事を修めた後、参列者に食事を供養する、戒律の定めに従った食事である「^{さいじき}斎食」のことです。施主にとっては布施行という修行であり、参列者は仏道精進の心で食事をいただく修行です。昔はお供えをしたお^{りょうぐぜん}霊供膳と同じものを食べていましたが、現在では別の食事が用意されるようです。お斎はお食事会で

はなく、法要の後に、僧侶や参列者と食事を共にする仏事です。故人を縁に、日頃会えない人たちが集まって親しく時を過ごすことは、故人もさぞ喜ばれることでしょう。ですから、年忌法要を執り行い、故人の遺徳を偲び参列者一同で食事を行うことが法事となります。

【お霊供膳の一例】



お霊供膳はこんなふうにお供えするんだね。



お墓参り

自宅や菩提寺で法要が執り行われた後に、お墓にお参りして故人の冥福を祈ります。その時に塔婆をお墓に建立します。墓前には水や線香・花を供えます。ところによっては菓子や果物・お霊供膳を供える地域もあります。お供え物をした後に墓前に手を合わせます。

【塔婆】とうば

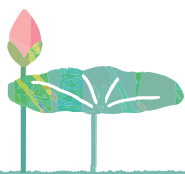
「卒^{そとうば}塔婆」の略でもっとは仏塔のことを意味します。仏塔とは、お釈迦さまの舍利（遺骨）を納めた塔のことです。仏塔は、五輪の塔とも呼ばれるように五段の石を重ねたもので、仏教の宇宙観である5大（空・風・火・水・地）が表されています。それを簡略化したものが木製の塔婆で、5段になるよう横に切り込みが入れられています。

つまり、法事の時に使用される木製の板塔婆は、そのまま仏さまのお姿でもあり、塔婆を1本建立することは仏さまを1体つくった功德と同じであるとされています。住職によって書かれた塔婆の文字は、仏さまと故人とが一体となり、成仏した人間の尊厳が示されています。施主が故人のために塔婆を建立する功德は、参列したすべての人に行き渡るとされています。

コラム

法事は故人に会える機会

故人が仏さまに成る・成仏することを私たちは願います。しかし、何も行わずに仏さまになるのではなく、故人を思い、法事を行って、拝むという善行を積む人がいるからこそ、仏さまに成るのです。また、厳かな法要を通じて、姿の见えない故人と改めて出会う機会ともなります。故人を縁として、家族や親戚、縁者の方々が集まることにより、今まで気づかなかった故人の一面を知ることがきっとあるでしょう。法事を行うことで、故人に感謝の気持ちを伝えたいと思われたら、菩提寺の住職に気軽にご相談ください。妙心寺では、開山さまや祖師に対して毎年法事を勤めています。法事は年忌法要だけでなく、いつでも行える仏事です。



お寺の法要

お寺の行事

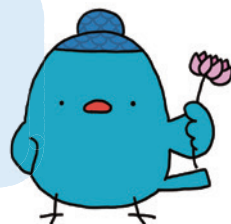
お寺ではお檀家さんのご先祖さまの供養法要だけではなく、「二祖忌^{にそきさんぶつえ}三仏会」と呼ばれるお釈迦さまや祖師（歴代の和尚さま）にまつわるさまざまな法要が執り行われています。

お釈迦さまにまつわる法要 — 三仏会

お寺では、お釈迦さまにまつわる次の三つの記念日に毎年法要が執り行われます。

- ① お誕生日 ————— 降誕会^{こうたんえ}（4月8日）
- ② お悟りを開かれた日 — 成道会^{じょうどうえ}（12月8日）
- ③ ご命日 ————— 涅槃会^{ねはんえ}（2月15日）

三つの法要はお寺によって日程が変わることがあるみたいだから、詳しくは菩提寺の和尚さんに聞いてみてね！



お釈迦さまとは？

お釈迦さまは、今から約2500年前に実在したゴータマ・シッダッタ（シッダールタとも）という人物です。ヒマラヤ山脈のふもとにあったシャカ族の国の王子としてお生まれになりましたが、人間の「苦しみ」とどう向き合えばいいのかという思いから出家されました。紆余曲折の長いご修行の中で真の悟りを得て、その教え（仏教）を広く伝えた方です。

今では「釈迦如来」という仏さまとして、たくさんのお寺やお仏壇で大切にお祀りされています。

① 降誕会

4月8日は、お釈迦さまのお誕生日で「花まつり」ともいいます。

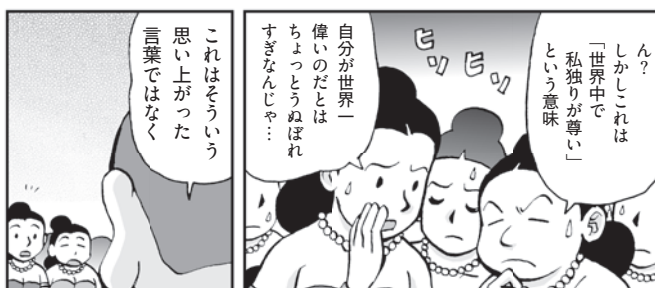
この日、お寺では花御堂^{はなみどう}の屋根を季節の生花で葺き、お堂の中に甘茶を注いだ大皿（桶）を置いて、その真ん中に可愛らしいお釈迦さまの立像をお祀りします。みんなで甘茶^{ひしゃく}を柄杓ですくいお釈迦さまにかけてお誕生日のお祝いをし、大切に法要を執り行います。



由来

お釈迦さまがルンビニーという地の花園でお生まれになったその時、一面に甘露^{かんろ}の雨が降りそそぎ、生まれて間もないのにすっと立ち上がり、7歩（もしくは四方に7歩ずつ）歩いて右手で上を、左手で下を指差し「天上天下、唯我^{てんじょうてんげ ゆいがどく}独尊^{そん}」と宣言されたと伝えられています。花まつりでお祀りされるお釈迦さまの立像が上下を指差していたり、甘茶をかけて甘露の雨を表すのは、この伝説に基づいています。

天上天下 唯我独尊



月刊誌『花園』二〇一九年四月号「心揺さぶる! 禅の名場面」より 漫画/今木商事

降誕会はもうひとつの誕生日

お釈迦さまも人の子ですから、伝説で伝えられていることが実際にあったとはちょっと考えにくいと思いませんか？おそらく私たちと同じように「おぎゃあ」と産声を上げたのではないのでしょうか。それでもその産声を聴いた人たち、特にご両親は「この子は天の上にも天の下にも、何ものにも代えられないとても尊い子なんだ！」と思ったことでしょう。

しかし、これはお釈迦さまだから、一国のお世継ぎだから特別にというわけではありません。実は今ここでこうして生きている私たちも皆ひとりひとりが何ものにも代えられない尊い存在として祝福されて生まれてきたのです。私たちは皆それぞれに必ず誕生日がありますが、この降誕会はお釈迦さまのご誕生をお祝いするだけでなく、今を生きる私たちみんなが「生まれてきてくれてありがとう」と言われる存在なんだ、と気づけるもうひとつの誕生日でもあるのです。

②成道会

12月8日はお釈迦さまがお悟りを開かれた日であり、仏教が始まった日ともいえます。

しゅっさんぶつ

「出山仏」という絵をかけて法要が営まれます。

由来

人はさまざまな苦しみからどうすれば逃れられるのか、どう向き合えばいいのかと思い悩み、お釈迦さまは29歳の時に地位も家族も捨てて出家されました。長年、迷いながら修行された末、12月8日の明けの明星をご覧になって「なんと不

思議なことだろう、生きとし生ける私たちは皆、もともと仏と同じ智慧と姿をそなえていたのだ。本当はもう救われていたのだ。ただ、煩惱執着（いろいろなことにとらわれたり、偏ったり、こだわったり）するから、それに気がつかないだけなのだ」と、お悟りを開かれました。お釈迦さまが35歳の時のことでした。

【出山仏】しゅっさんぶつ

お釈迦さまが苦行の無意味さに気づき、山を下りられる様子が描かれています。この後、菩提樹の下に坐ってお悟りを開かれます。長年の修行で髪も髭もボサボサとなり、やせ細っているものの、とても穏やかな眼差しをしていらっしゃいます。

出山釈迦図
狩野探幽筆
妙心寺蔵



コラム

生まれながらの「^{ぶっしょう}仏性」に気づく日

お釈迦さまが気づかれたのは、私たちが生まれながらにそなえている「仏性」です。それは仏そのもので、どんな時でも決して損なわれることはありません。

成道会はそんな大切なものに改めて気づくことができる大切な日でもあります。

禅宗の修行道場では、今でもその故事にちなんで、12月1日から8日の明け方までを1日として、一時も横にならずに坐り続ける「^{ろうはつおおぜっしん}臘八大 摂心」という厳しい修行が毎年行われています。

③涅槃会

2月15日はお釈迦さまのご命日です。

法要の際には正面に涅槃図^{ねはんず}という大きな絵が掛けられ、法要が営まれます。

由来

クシナガラという地でお釈迦さまの入滅が近づいたとき、それを知った大勢の者たちはおおいに嘆き悲しみました。最後の教えを聴くために集まってきた者たちはお弟子さんや信者さんといった人に限らず、菩薩や神様、天女、鬼、動物、虫にいたるまでさまざま、皆がお釈迦さまを囲って一様に泣いて悲しみ、その悲しみのあまり沙羅双樹林の木が半分枯れてしまったそうです。お釈迦さまはそんな大勢の者たちに向かって、不安になる必要は決してないのだと最後の説法をされた後、頭を北にして顔は西に向け、右脇を下にして横になり、80歳で入滅されたと伝わります。

【涅槃図】ねはんず

満月の月明かりの下、お釈迦さまが入滅され大勢の者たちが嘆き悲しむ様子が描かれています。

涅槃図の内容は原則があり、ここにどんな人物が描かれるのかは決まっていますが、描かれた時代や描き手によって登場する動物などには違いがあるそうです。

いろいろなお寺を巡って
涅槃図を見比べてみるのも
面白いかも。



妙心寺蔵

お釈迦さまがお亡くなりになったから悲しいというだけではありません。誰であろうと人が亡くなるのはとても悲しいことであり、そして生きとし生ける私たちもいつかは死んでいかなければならないのだ、ということに気づく日でもあります。

歴代の和尚さま（祖師）にまつわる法要 — 二祖忌 にそき

その宗派・お寺とゆかりの深い歴代の和尚さまのことを「祖師」といい、ご命日にはそのご遺徳に感謝して毎年法要が執り行われています。その代表格が だるまき かいさんき 達磨忌と開山忌です。

● 達磨忌

10月5日は禅宗の祖とされる だるまだいし 達磨大師（ダルマさま）のご命日です。

ダルマさまというと、日本ではよく知られていますが、多くの人は赤くて丸っこい起き上がりこぼしのような体に、ぎょろりとした大きな目、いかつい黒髭を生やした縁起物のイメージをお持ちではないでしょうか。



達磨大師とは？

今から約1500年前、お釈迦さまから数えて28代目として法（教え）を^つ嗣ぎ、その教えをインドから中国に伝えたと言われるお坊さんで、中国の禅宗の初祖となりました。

中国へ来られた達磨大師は^{すうざん}嵩山の少林寺にこもられ、9年もの間、壁に向かって坐禅修行に励んだと伝えられています。後に^{え か}慧可という優れたお弟子さんができて、達磨大師の法を嗣いだことが中国で禅宗が栄える始まりとなっています。

そのため、日本の禅宗では達磨大師はとても大切にされていて、本堂ではご本尊さまの隣にお祀りされているお寺も多いようです。

コラム

真実を実体験してこそ得られるもの

達磨大師には数々の逸話や教えが伝わっていますが、中でも有名な言葉に^{きょうげべつでん ふりゅうもんじ}「教外別伝 不立文字」というものがあります。仏法や悟り（気づき）というのは、經典の文章や祖師方の言葉だけでなく、そこに自らの実践・実体験が伴ってこそ初めて得られるものである、ということです。

これは仏法に限ったことではありません。この現代社会では、私たちの周りには常にたくさんの情報があふれており、いろんなことを頭でわかったつもりになったり、あるいは振り回されてしまうことが少なくありません。しかし、実際に言葉や論理だけで理解できるものではなく、悟り（気づき）という体験を経なければ真実を得ることはできないのです。

達磨忌にはどうぞお寺へお参りいただいて、達磨大師のそんな教えを今一度かみしめていきたいものです。

● 開山忌

開山とは山を開く、すなわちお寺を開くという意味で初代住職のことをいいます。そのお寺の開山さまが必ずしも臨済宗妙心寺派の和尚さんであるとは限りませんが、今お寺があるのは開山さまのおかげであることに変わりはありません。

そのご恩に対し感謝の思いをもって開山さまのご命日にお勤めをする。それが開山忌です。

どうぞ菩提寺の和尚さまに開山さまのお話をお尋ねになってみてください。

妙心寺で行われる法要

● 本山 開山忌

妙心寺の開山さま（初代住職）は関山慧玄かんざん えげん禪師（無相大師むそうだいし）であり、そのご命日は12月12日です。

毎年、妙心寺の法堂では管長はつとうさまをはじめ大勢の和尚さま方が参列され、厳粛に法要が執り行われています。



妙心寺の開山さまとは？

お名前は関山慧玄禅師（無相大師）といいます。

建治3年（1277）、信濃の国（長野県）の高梨家に生を享けられました。

幼い頃、鎌倉の建長寺にのぼり、^{こうこんおしょう}広嚴和尚の下で出家しました。51歳の時に大徳寺開山 ^{だいたうこくし しゅうほうみょうちよう}大燈国師（宗峰妙超禅師）のお弟子となり、その2年後に修行の末ついに大悟されました。

その後、突然姿を消して美濃の国、^{いぶか}伊深（現在の岐阜県美濃加茂市）の山里に居を定めます。昼は村人と共に牛を追ひ田畑を耕し、夜はひたすら坐禅をされるという日々を過ごし、村人から「慧玄さん」と慕われておりました。

建武4年（1337）大燈国師が亡くなられ、かねてから国師について禅の修行をされていた^{はなぞのほうおう}花園法皇さまは花園離宮を禅寺とし、国師が推薦された関山禅師を招こうとされました。関山禅師は再三固辞されましたが、大燈国師の遺命としてこれをお受けになり、都に上り妙心寺の開山さまとなりました。

開山さまが妙心寺に住持されて20余年のある日のこと。弟子の^{じゅうおうそうひつ}授翁宗弼禅師を呼び、^{あんぎや}行脚（修行の旅）に出ると言われ、^{ふうすいせん}風水泉（井戸）のもとで「自分の事は忘れても構わぬが、法の祖父である大応国師、法の父である大燈国師のご恩を忘れるような者は私の弟子ではないぞ」と報恩の訓戒を残し、そのまま息を引き取られました。^{わらじ}草鞋をはき、^{あじろがさ}網代笠をかぶり、杖をついて立ったままのお姿でした。

また、開山さまは^{せんげ}遷化（逝去）された後に^{おくりな}諡として後奈良天皇など6人の天皇より国師号を、明治天皇より「無相大師」という大師号を授与されました。

開山さまは今でも妙心寺の開山堂で大切にお祀りされています。

.....

ほうおうき 法皇忌

天皇家や幕府などによって建てられた大きなお寺には開基^{かいき}さまという方がおられます。仏法によって地域に安寧をもたらしたいと誓願し、もしくは自らの一族の菩提を弔うために私財を寄進してお寺を建立された方のことです。



法隆寺なら聖徳太子、東大寺なら聖武天皇が有名ですが、大本山妙心寺の開基は花園法皇さまです。

そして11月11日は花園法皇さまのご命日で「法皇忌」と呼ばれています。

花園法皇さまは妙心寺の玉鳳院^{ぎょくほういん}で大切にお祀りされていますが、法皇忌には毎年ここで献茶式が行われ、法堂にて法要が営まれます。

花園法皇さまとは？

花園天皇さまは南北朝直前の非常に不安定な時代に、わずか12歳で第95代天皇として即位されました。しかし幼少であったため、実際の政治は伏見・後伏見の両上皇が行っており、民衆の暮らしぶりを目の当たりにしたときに、ご自身の無力さを切実に感じられたそうです。それでも「今の自分にできることを」と思い、必死に勉学に励まれました。特に仏教、禅の教えに心を寄せ、上皇となった後には出家されて法皇となり、大燈国師の下で修行し大悟されます。

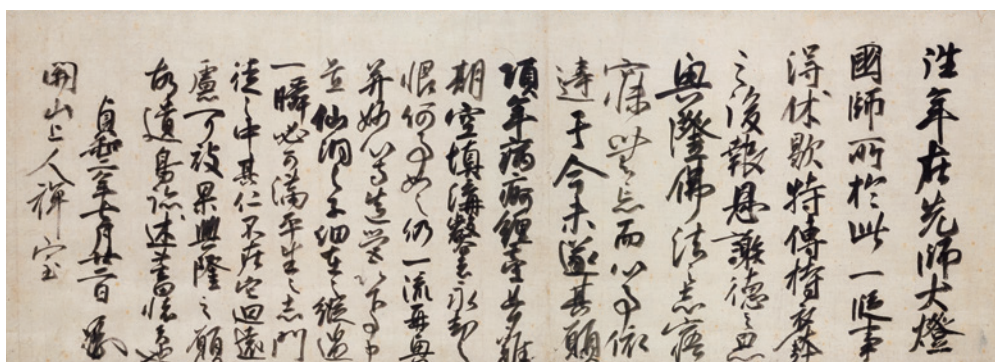
激動の時代の中、世の人々の安寧を願い、報恩謝徳の思い、興隆仏法の志をもって離宮を禅寺とし、関山慧玄禅師を開山さまとしてお迎えしたのが妙心寺の始まりです。晩年、最後の願いとして報恩の思いを開山さまへ託されたお手紙である「^{おうねん ごしんかん}往年の御宸翰」が今でも妙心寺に伝わっています。

また、花園法皇さまは和歌にも精通されていて、今もたくさんの歌が残ってい

ますが、その中の一つに「今さらに 我が私を祈らめや 世にあれば世を 思ふばかりぞ」（今さら私自身のことを神仏に祈ることもなかり、この世にあってこの世の人々の幸せを思うだけだ）とあり、常に今を生きる私たちの安寧を願う法皇さまのあたたかい御心をうかがい知ることができます。

【往年の御宸翰】おうねんのごしんかん

花園法皇さまが崩御される約1年前の貞和3年（1347）7月22日、病に伏しながらも尽くしきれないご自身の報恩の思い、仏法をもって世の安寧を願う切実な思いを開山さまに託されたお手紙です。



重要文化財 花園天皇宸翰置文 妙心寺蔵



開山さまと法皇さまの月命日にちなんで、妙心寺派では毎月11日・12日を「おかげさまの日」にしてるよ。この2日間はLet's OKAGESAMA！

各お寺で行われるその他の法要

さいえ 齋会

皆さまがご先祖さまの年忌法要を執り行われるのと同じように、お寺でも歴代住職の年忌法要が執り行われます。この歴代の和尚さま（祖師）の法事のことを「齋会」といいます。

現住職をはじめ、ご縁の深い和尚さま方やお寺の役員さんたちにご参列をいただいて、節目節目に法要が大切に執り行われます。



教化センター所長 足立 宜了

布教研究委員会

服部 雅昭（布教伝道室室長）

岩浅 慎龍（布教伝道室主任）

福田 宗伸（布教研究委員長）

池田 織隆 大野 泰明 窪田 顕脩

竹中 智厚 華山 泰玄

教化センター

吉瀬 公隆 箱崎 善法

〈編集協力〉三重野 久美子（株式会社ITP）

※本冊子の内容は、妙心寺ホームページでもご覧になれます。
檀信徒への教化活動にご利用ください。

<https://www.myoshinji.or.jp/rinzaibutuji/>



令和4年（2022）7月1日発行

編 集 臨済宗妙心寺派教化センター

発 行 臨済宗妙心寺派宗務本所

発行人 野口善敬
〒616-8034
京都市右京区花園木辻北町1
TEL 075-463-3121
FAX 075-464-9586

制作・印刷 株式会社 I T P



発行元：臨済宗妙心寺派宗務本所
販売価格：500円(税込)